

to forget that they love none but themselves; that they are being devoured with ambition. Also: no Italian of the Cinquecento was a greater adept at deep and deadly hypocrisy and intrigue, and to statesmen I would say: Use them if you *can*, but be careful of not being used yourselves.

Berlin, 23 August 1910

My dear Ross,

.....Tachibana was here a few days ago. Jove! He was in luck not to have fallen into one of those waggon ruts in the Turfan loess-soil; he could not have got out of it again. Otherwise he is a fine little chap, and I think will become a most useful member of the Turfanite crowd. Sharp enough of wit he undoubtedly is, and his being a Buddhist priest gives him a tremendous pull.

(Both Ends of the Candle, pp. 106—107)

前の手紙に「十六世紀のイタリア人がどんなに偉くても」とあるのは、マキヤヴェリ(Niccolò Machiavelli 1469—1527)を指しているのであらう。また「利用出来るものなら、利用して御覽なさい」という結びの句のイタリックスは、原文に従ったものである。

イタリア中東亞研究所刊の 新雑誌「支那」

Cina, Vols. 1—3 (1956—1957). Pp. 186, 104,
136 Roma: Istituto Italiano per il Medio ed
Estremo Oriente (Prezzo L. 1,200 : 550 : 1,100)

榎 一 雄

ローマ大學のベテック教授からラディオテレヴィジオーネ
「イタリアーナ」での連續放送を纏めた「支那文明の歴史的側
面」(Luciano Petech: *Profilo storico della civiltà
cinese*. Pp. 220+ (1) Pts. I—XXI Roma: Edizioni
Radio Italiana 1957)を贈られて面白く讀んだが、その中
に「支那」という雑誌が引用されているので、問合せた所、
教授の斡旋で既刊號三冊が中東亞研究所から送られて來た。
この研究所刊行の雑誌「東と西」(East and West)はよく
知られているが、「支那」はまだ日本では餘り知られていな
いと思われるので、ここに簡単に紹介する。

本誌刊行の趣旨は、第一巻の巻頭に見える所長ツッチイ(G. Tucci)教授の序文に明かである。その要旨に曰く、

イタリア中東亞研究所はあらゆる點で支那の文化的動靜を注意深く見守っている。一方、支那研究が永い傳統を有しているイタリアでは、少からぬ人々が新しい支那の思想・藝術・組織及びそれらの進歩について、公平な立場で知られることを欲しているにも拘らず、民衆的支那に於ける文化的生活の諸面を明かにしてくれる適當な研究もなければ方法にも缺けていることが自覺されているのである。そこで昨年「一九五五年」の末にイタリア中東亞研究所の中に設けられた支那學研究センター(Il Centro di studi sinologici)は出来るだけ速かにこの要望に應ずることを考え、毎年一冊支那についての情報を出版することにした。言うまでもなく、我々は過去を等閑に付するものではない。支那のような古い文明に輝いている國では、古代の傳統の中に現在の息吹きの正しいことの理由づけが見出されるからである。しかしました、もし過去にばかり注意していると、その偉大さのみを見ようとすることになる。要するに、洛陽や安陽で行われた、非常に重要な發掘についても、支那の科學者の論文についても、差別することはなく、知らせる

に値すると思えば、詩や文學の何頁かを翻譯することもあろう。(中略)

支那についてはマルコポーロが歐洲にそれを紹介し、又マテオリッチが稀な客觀的態度でその長所と徳性とを記して以來、我々イタリア人にはその文化が興味を中心となつてゐる。この興味は人間の好奇心から出た純粹な、單純な興味である。それは人々が人間の生活を規定しているあの知識・科學・空想・創造などの多くの部分を負うているインドやエジプトやギリシアやイタリアなどに對すると同様に、一つの民族をその創造と發達とに關して常に更に根本的に知りたいという欲望に刺激され、育てられた興味にすぎないのである。

要するに、本誌は支那の現状、特に文化とその傳統とについて知らせようというのであつて、現代支那の政治のあり方は是非を論じようというのではない。これはツッチイ教授の平生の主張であつて、一九五六年に催された佛成道二千五百年記念の或る會合にも、その議題が餘りにも政治的であると言つて、出席を拒否したことを氏から親しく聞いたことがある。

さて本誌はリオネーロウランチオッティ氏(Dott. Lionello Lanciotti)を編輯長とし、支那文化の諸方面に互る問題を取りあげ、それを出来る限り平易に説明しようとして

いる。次にそれら論文・翻譯の題目を舉げてみよう。

第一卷

支那における考古學的發掘 (Yang Feng-chi)

支那の少數民族 (Luciano Petech)

支那のラテン文字 (Giuliano Bertuccioli)

「二つの石」—石谿と石濤、十七世紀の個人主義的畫家 (Alberto Giuganino)

郭沫若—その半生と作品についての覚え書 (Lionello Lanciotti)

現代の支那詩人—Ai Ching [詩八篇の譯] (G. Bertuccioli)

老殘の夢 [劉鶚の略傳と老殘遊記の解説及び第一章の翻譯] (L. Lanciotti)

支那の小説 [金瓶梅・聊齋志異・浮生六記の紹介] (Emilo Cecchi)

聊齋志異の中三篇の翻譯⁽²⁾

變死 [金瓶梅よりの翻譯]⁽³⁾

花の舟 [浮生六記よりの翻譯]⁽⁴⁾

支那の農業改革 (Giacomo Giorgi)

一九五四年の支那憲法 (Ernesto Rech)

第二卷

イタリア中東亞研究所刊の新雜誌「支那」 榎

民衆詩人屈原 (郭沫若)

魯迅の「野草」の閱讀への注釋 (Martin Benedikter)

「野草」の部分譯二篇 (")

ロレンツォ・マガロッティと支那 (L. Lanciotti) [イタリア

アの科學者 Lorenzo Magalotti (1637—1712) と彼が

一六六五年フローレンスでチェスウィット宣教師ジョヴァンニ・グーベルに會い、支那についての問答を記した

Relazione della Cina, cavata da un ragionamento tenuto col P. Giovanni Grueber della Compagnia di Gesù nel suo passaggio per Firenze-

l'anno 1665 の概要の説明。]

七—九世紀の日本に於ける支那文學 (Marcello Muccioli)

盜賊—「水滸傳」支那の古い小説 (M. Benedikter)

水滸傳序 [施耐庵の序文の譯]

水滸傳 [第一章の譯]⁽⁵⁾

今日の支那の學校問題 (Piero Corradini)

現代支那の道教 (G. Bertuccioli)

佛教と中華人民共和國 (Paolo Daffinà)

現代支那のイスラム (Ernesto Rech)

第三卷

支那に於いて、人類の起源 (Adolfo Tamburello)

孟浩然の詩六篇 (M. Benediktter)

魯迅と「超人」の危機 (Massimo Scaligero)

狂人日記 (魯迅)

十七—二十世紀のイタリア文化に於ける支那 (1) Giudizio

di G. B. Vico に於ける支那 (Paolo Daffina) (2)

Carlo Cattaneo の「古代及び現代支那」(Riccardo

Loreto) (3) Giuseppe Ferrari [一八一—一八七六]

の「支那と歐洲」(L. Lanciotti)

詩經について的小論 (郭沫若) [「奴隸時代からの譯」]

詩經から (L. Lanciotti) [國風・小雅等四篇の譯]

支那映畫史 [一九〇四—一九五六] (G. Bertuccioli)

インテリゲンチヤの映畫 (Elio Rufo)

ネパールと中華人民共和國 (E. Rech)

支那に關する書物 (L. Lanciotti)

[最近二、三年にイタリアで出版された支那及び支那文化關係の出版物の中、一般に興味のあると思われるものを擧げて批評する。今後每號掲げられる予定。ここには聊

齋志異・金瓶梅・支那現代史・「王維と裴迪」・水滸傳・

支那哲學史 (馮友蘭)・支那叢書 (ミラノのイタリア

支那文化研究所 Istituto Culturale Italo-Chinese 編

刊、支那古代哲學史⁽¹⁾、二冊、一九五六年、大學・中庸・

論語、一冊、一九五六年、老子・道德經、一九五六年、李白・杜甫詩選⁽²⁾、二冊、支那の佛教、一九五六年、支那の大詩人達、二冊、第一冊は王維、(一九五七年)が取上げられているが、この中、支那叢書の各冊については、これらを似而非支那學の所産とする頗る辛辣な批評が加えられている。]

イタリアが支那研究についてマルコ・ポーロ或いはマテオ・リッツィ以來の古い傳統をもっていることは、よく知られている⁽³⁾。しかし十九世紀以後は支那學者の數も少く、その活動も特に顯者であつたとは言えない。この雜誌の刊行が機縁となつて、イタリアに於ける支那に對する興味が一層高まり、支那學の研究がいよいよ盛んになることを希望する。

(1) これは「Letteratura e Civiltà」と題する叢書の一である。この叢書は既刊十二冊、その中には

Sabatino Moscati; Il profilo dell' Oriente mediterraneo (Panorami di civiltà preclassiche).

Francesco Gabrieli, Aspetti della civiltà arabo-islamica. Giuseppe Schiro, La civiltà bizantina.

等の名が見える。この中、ガブリエリ氏の「アラブ・イスラム文明の諸相」は二〇七頁(序文、索引共)、一九五六年の序文があり、次の十六章からなる。(一)イスラムの搖籃、(二)ア

ラビアの發言者、(三) イスラムの信仰と法制、(四) イスラムの傳播、(五) イスラムと西洋—スペインのアラビア文明、(六) アラビア—スペイン文化、(七) イスラムと中世のイタリア、(八) アラビア治下のシシリイの歴史と文化、(九) シシリイのアラビア美術、(十) 古典アラビア文學、(十一) 現代アラビア文學、(十二) ヘルシマ文學、(十三) 回教徒の清教徒主義とモタニズム、(十四) イスラムとキリスト教、(十五) アラビア世界の復活、(十六) 現代のイスラム世界のパノラマ。尤も一般の聽取者を對象とした通俗講演であるためか、各種の問題に一應觸れてゐるだけで、深い省察や分析は見られないばかりでなく、イスラム文明に對する著者の立場も一向明かにされていない。但し各章末の書誌はイタリアの學者の著作を主として擧げているので、我々には頗る目新しう。

- (2) L. N. di Giura, I racconti fantastici di Liao, Milano 1955 じやう。じやうじやう Vol. III, pp. 126—127 參照。
- (3) P. Jahier, Chin Ping Mei, Torino 1955 じやう。じやう原文からの最初のイタリア語譯 (Vol. III, p. 127 參照)。
- (4) L. Lanciotti e Tsui Tao-lu, traduto dal, Sei Racconti di Vita Irreale, Roma 1955 じやう。
- (5) C. Bovero, traduto dal, I briganti, Torino 1956 じやう。じやう Franz Kuhn, Die Räuber von Liang-schan Moor. Leipzig 1934 u. Stuttgart 1953 からの重譯、卷頭に Martin Benedikter の序論がつけられて (Vol. III,

p. 128 參照)。

- (6) Lucian Bianciardi, traduto dal, La vera storia di Ah Q e altri racconti, Milano 1955 じやう。
- (7) Storia della Cina contemporanea, Roma: Edizioni di Cultura Sociale 1955. 東北軍政學校叢書 (Collectivo della Accademia Politica Militare di Tung-Pei) の中の支那現代史 (ロシア語譯) から一九二〇—四五年についての記事を取り、「延安から北京へ」(英語版) の梗概を卷末に添えて、一九四五—五四年の記事を補つたもの。
- (8) Martin Benedikter, Wang Wei e P'ei Ti, Poesie del Fiume Wang (鴨川集). Torino: Einaudi 1956
- (9) Fung Yu-lan, Storia della filosofia cinese (Biblioteca Moderna Mondadori) 1956. Derk Bodde の英語 Short History of Chinese Philosophy からの重譯。
- (10) Antica Filosofia Cinese, Milano 1956. 中江 A. Galletti, L. Magrini, G. Fraccari, C. Ou, P. Desderi, Hoang Kio-tcheng, Fung Yu-lan 諸氏の論文を含む。
- (11) Prof. Wang Hsin-pu なる人は英語の散文に譯したものが Maria Attardo Magrini 女氏の訳に譯し直したものであると云ふ。
- (12) 彼の著として Filippo de Filippi, I viaggiatori italiani in Asia. Roma: ISMEO 1934 pp. 19—20 參照。